
War Correspondent

kazuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

War Correspondent

【Nコード】

N8541D

【作者名】

kazuki

【あらすじ】

私は娘を、学校のバスに乗せる。私はテレビをつけると戦争が始まると書いてあった。そして、私の娘はこの長い戦争の犠牲者となる・・・

第一話 悲しみ・

「ママ、起きて！」

私は娘に起こされた。時計を見ると7：40分だった。急いで起きると、黄昏の光が私の目を差し込んだ。いつもとは、変わらない朝だ。

「ママ、もう行くよ！朝ご飯は？」

「あっ……」

「・・・作り忘れた分けないよね？」

「冗談よ」

「ったく・・・もう行くね」

「じゃあ、お忘れ物ないようにね」

「さようなら」

「いつてらつしやい」

しばらくすると、家の前に黄色いバスが止まった。

娘の小学校まで8 kmほどある。

行く途中に通称、王様橋といわれるものがある。

距離は2 km。自転車では通れない。この橋は、この国一番の大きさを誇るものだ。

この大きさには、総理大臣も驚いたらしい。

しばらくして私はポストに入っている朝刊を取り、リビングでテレビをつけた。

最近の出来事を知るためにニュースは欠かせない。

「今日のニュースです。今日・・・がありました」
庭には小鳥がかわいく鳴いていた。

「ピッピ」

小鳥が飛んでいった。

しばらくすると

「ピンポンパーポン」

大きな音量でその音が聞こえた。

私は急いで振り返った。

「ただいまのニュースです。皆さん落ち着いてください。
たったいま我が国ポルスにレントが宣戦してきました。

そして、先ほど正体不明の戦闘機F-14によって王様橋が崩壊しました。

もう一度繰り返します。皆さん落ち着いてください・・・」

テレビのチャンネルを変えると、王様橋が炎上していた。
炎上どころではない。中央部分なくなっていた。

私はその映像を見た瞬間、しばらく思考が停止した。

海上に黄色いバスが浮かんでいた。

「私かの娘が乗っているバスだ」

私は、玄関のドアを開けた。

そこには、見るべきのないものが映し出されていた。

漆黒の飛行機が橋の上で飛んでいた。

橋を見ると、真中を中心に斜めになっていた。

しばらくすると橋の上にはだいろに似た高速の物体が浮かび上がった。

「機関銃だ！！」

私は、叫んだ。

漆黒の飛行機は、やがて悪魔の火に乗り移られた。

飛行機は、大爆発を起こした。

私は、あまりにも突然の出来事によりなにが起きたのか分からなかった。

この出来事が長い近未来戦争の始まりだった。

第一話 悲しみ・（後書き）

前の小説より面白かったらいいです。

第二話 E B G A G E 1

私はしばらく目を閉じることができなかった。

しばらくして、職場のウィリアムからメールがきた。

「今日は休みだ」

この短文が書いてあった。

私はいったん家に帰り玄関の写真たてを眺めた。

そこには私と父、娘が映っている。

父は戦闘機の部隊で働いている。

私はソファアに座り娘のことを考えた。

「あの子は、死んだ」

頭の中にはそれしか考えることはなかった。

しばらくすると家の天井がガタガタと動いた。

その後、巨大なエンジン音が響いた。

私は外に出る気がしなかった。

悲しい現実を見せられた私は、なにも行動することができなかった。

しばらくして私はテレビをつけた。

私の職業は記者だ。それも軍事に関すること――

テレビには、レントの独裁者ナバロが拳をあげ演説をしていた。

「この戦争は、不当な国交を行ってきたポルトに対する

国民の怒りだ！」

怒涛の声は、すざましかった。

レントは、かつて国内での内戦があった。

その結果は結局、国家が勝利した。

そのときポルトは、資源に恵まれているにもかかわらずひとも支援しなかった。

レントは今それで怒っているらしい。

しばらくすると、レントの軍事力の画面が出てきた。

軍事力はこの後の戦争の結果を左右する大きなことである。

「まず、兵隊の数ですが。これは、かつて内戦があったためポルト側のほうが有利です。」

次に兵器です。

兵器力は、圧倒的にレント側のほうが圧倒的に強いです。

もしかしたら、この戦争で満足いく結果はないかもしれませんが」

いまの私に満足な結果などない。

私の愛しい娘を失っている。

しばらくするとテレビに避難勧告命令が映った。

だがそれは、ここから2200km離れたオーシヤスだった。

そこは、レントに一番近い町だった。

もしも、このままレントが圧倒的な軍事力を使い

この町、オーブリにやってくるのも早いかもしれない。

しばらくすると、家の電話の子機がなった。

電話の相手は父からだった。

「もしもし」

「ああ、グリーンか。大丈夫か？」

「いいえ。娘が・・・娘が・・・」

「ああ・・・とりあえず泣くな」

「ごめんなさいね・・・今日は何の用事かしら？」

「俺な、サンダエルバの近くの戦闘部隊に配置されることになっ

たから

しばらく会えなくなるかもしれない・・・」

「あのさあ・・・私そっち行っていい？」

「だめだ。こっちは、もうじきレントがやってくる。」

そういえば、あんたは記者だったな？」

「ええそうよ」

「戦争の状況は、教えてやるから我慢しな」

「ええ分かったわ。でもこれ以上死なないでよ」

「それは分からない」

そのことばを残して電話は切れた。

それは、私に別れを告げるものだった。

窓の外を見ると薄暗く空は暗んでいた。

これからの戦いを暗示させていた。

第二話 E B G A G E 1 (後書き)

ENGAGEというのは、開戦という意味です。今後ともよろしく
お願いします。

第三話 S W B M

ブルブル・・・

電話が鳴った。

「もしもし」

「ああ私だウィリアムだ」

「何かご用ですか？」

「今すぐ職場にこれるか？」

「ええ、分かりました」

私はそう言つて、黒い服を着て家を出た。

海上ではようやく橋の消化活動が終わったらしい。

私は橋にさようならと言った。

そこは私の娘が永久とわの眠りにについている所だ。

そんなことを考えながら、職場についた。

「おお、グリーン君か」

「所長、今来ました」

「これを仕上げてくれないか」

そこに記されていたのは、見たことのない戦闘機いや、爆撃機の写真と文だった。

「グリーン君、それを今日までにパソコンにとりこんで欲しい」

「ええ、分かりました」

私は、自分のパソコンの前に座った。

一度、記事を読み返した。

「レントの新作爆撃機ブルーフ登場。対空砲40mm45基、S W B M搭載」

40mmというのは一発で戦闘機を一台破壊できるレベルだ。

一番不思議なのがS W B Mというのだ。私は、今まで戦争の取材をしてきたが

これは、見たことのない兵器だ。

私は、疑問に思い所長に聞きに行った。

「これなんですか？」

「いいそびれてたな。よしみんなも来い！！」

しばらくすると、取材班が30人ほどやってきた。

所長は、パソコンの中のひとつのビデオを画面にだした。

そこには、恐ろしいものが映っていた。

海上に古い駆逐艦（戦艦の中でも一番戦闘能力が低いもの）が2
0 艦ほど止まっていた。

そして上空に現れたブルーフの機体の下が青白く光り始めた。

その光は、徐々に大きくなり、やがて爆発した。

「ド——ン」

その音が聞こえた瞬間、海上の駆逐艦は赤く燃え出した。

しかも、全ての駆逐艦を……

私は、そのシーンを見た瞬間背筋が凍りついた。

ブルーフは、とてつもない戦闘能力を備えていた。

もしも、こんなものが首都に降り立ったら、町は壊滅する。

それぐらいのことを断言できるレベルだった。

「所長、これは……？」

「これがS W B Mだ」

「どうしてこんなことが起こりうるのですか？」

「これは、衝撃波による攻撃だ。

大量の燃料を煙のようにはら撒き、その上からおびただしい熱で
空気を熱膨張させる。それがこれの原理だ」

私はいつかこのブルーフがやってくると確信した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8541d/>

War Correspondent

2010年10月21日23時46分発行